

# 連載 ～ダッカ襲撃テロ事件から5年～ 多元化する危機管理

2016年のダッカ襲撃テロ事件以降、外務省や国際協力機構（JICA）は危機管理体制の強化に努めてきた。他方、日本企業の危機管理対策はまだ緒に就いたばかりだ。コロナ禍を受けて、健康管理上の対策の重要性も増している中、多元化する危機管理について専門家が潮流を解説する。

## 免疫面で脆弱な日本人

2020年は新型コロナウイルスの感染が拡大し、世界中が振り回された年であった。年が明けた現在もいまだに勢いが収まる兆候は見られない上、「第三相」「第四相」「変異型」などの言葉も飛び交うようになり、人々の感情も重なって何が正解なのか分からないまま、世界各国の行政組織が右往左往している状況である。これがいつまで続くのかは不透明であり、感染症のみならず社会経済的な不安も相まって、世界各国の人々がうんざりし始めている頃ではないか。このような環境で海外に身を置く人たちは、冷静な目を持って情報や状況を把握し、いち早く適切な対応をして身を守ることが大事である。

海外での健康トラブルでも同じく適切な初期対応が大事である。医療へのアクセスや医療レベルが異なり、馴染みのない感染症に晒され得る海外で病に伏すのは不安だろう。また、渡航先で自分自身や家族、同僚の健康トラブルに直面した際、その判断が生命を左右する恐れがある上、多大な金銭的負担を受けざるを得なくなる可能性もある。

また、感染症は海外渡航者にとって大きなリスクの一つである。「世界一」と言っても過言でない清潔な環境に育った日本人は、裏を返せば免疫面で脆弱だ。渡航前に予防接種で受動的に免疫を付けておくこと、そして蚊よけや食品衛生などの予防策を講じることはもちろん大切だが、それだけでは十分とは言えず、思わぬ健康トラブルに見舞われる可能性もある。

加えて、病態も日本国内と考え方や取り扱いが変わることがある。例えば、熱帯地域で高熱が出た場

## 適切な 初期医療対応が肝要

今月の解説者



日比谷クリニック 院長  
奥田 丈二（おくだ・じょうじ）

1962年生まれ、東京慈恵医科大学医学部卒業。1990年より同大学の第一内科学教室で勤務した後、2000年に父の跡を継ぎ、日比谷クリニックの院長として活動。同クリニックは1960年から日本のトラベルクリニックのパイオニアとして、海外渡航者向けに渡航先や健康状態に応じた医療情報を提供するほか、予防接種や感染症予防薬の処方など各種医療サービスも提供している。同クリニックには毎年、2万人もの海外渡航予定者が来院する。日本渡航医学会評議員、海外医療支援協会理事

<https://hibiya-clinic.com/greeting/>

合、風邪、インフルエンザ、新型コロナより先にデング熱、マラリア、腸チフスの可能性を考える。後者の感染症は頻度が多く、前者と比べ物にならない程のリスクがあるからだ。渡航者は現地の処置方法を把握した上で、しっかりとしたノウハウや技術、設備を持つ医療機関を選択する事が大事である。

## 体調不良の際は保険会社やFDへ相談を

では感染症を含めて体調を崩した際、渡航者はま

ず何をしたらよいのか。緊急時は自身での対応に限界があることから、適切な処置ができる医療機関にアクセスし、専門家に判断を委ねる必要がある。しかし、医療システムや医療レベルが違う国で医療にアクセスするためにはどこに相談したらよいのか。

こうした時はまず保険会社に相談してほしい。海外渡航する際の“常識”として、渡航前に何らかの海外旅行保険に入っているはずだろう。保険会社は医療状況が分からない海外で体調を崩した際、とても頼れる存在になる。24時間体制の電話窓口を設けている保険会社もあり、その地区にある適切な医療機関を教えてもらえたり、その場での簡単な指示を受けられたりと、病気の初期対応で役に立つ。

近年は保険会社と契約して、キャッシュレスの診療サービスを提供する病院も増えている。医療機関と患者の双方が金銭的な心配をせずに済むほか、医療サービスのクオリティーも保たれている。また、医療レベルが低い地域で「緊急性が高い」と判断された場合は提携している医療搬送会社を使い、適切な医療機関へと搬送してもらえらる。どのような環境でも、すぐに連絡できるよう、保険会社の窓口の電話番号を事前に控えておいた方がよい。

海外に長期滞在していれば、ファミリードクター（FD）の診察を受けることも一案だ。日本では馴染みがないが、主に欧州を中心として医療システムにFD制が組み込まれている。これは何かしらの症状がある際、一先ずFDの診察を受け、必要に応じて専門医につないでもらう制度だ。自身や家族の既往歴や生活環境などを把握しているFDは、いざという時に相談ができ、頼りになる存在だ。先生によっては日本語での意思疎通が可能で、往診対応をしてくれたり、緊急時に勤務時間外でも電話応対をしてくれたりする場合もある。契約しているFDを介してのみ、専門の診療が受けられるという国もある程だ。FDは保険会社や行政機関、近所の薬局で紹介してもらえらる。欧米の都市部やアジア圏など、FD制がないところであっても、相談できる医師を決めておくことを推奨する。

ただ、一部の国や地域では治安が不安定な状態が続いている。この先、コロナ禍で経済状況が悪化し、治安がさらに悪化する恐れがあるが、人間は自由に外出できなくなった時ほど、体調を崩しやすくなるものだ。このような場所に赴く際は、絆創膏や消毒薬、痛み止めなどの置き薬を常備しておくことを推奨する。また、慢性疾患を抱えている方は十分な量の薬を手元に置いておいた方がよい。

## メンタルトラブルも早期の受診を

海外生活においては、古典的うつ病を中心としたメンタルトラブルもよく見られる。うつ病は生活文化の違いやより狭くなった人間関係など、生活環境の変化が誘因であると考えられている。特に生活レベルが日本より高い所で多く見られる傾向があり、最もリスクが高いのは帯同家族の妻である。うつ病はできる限り初期に治療を始めることが大切だが、病気との自覚がなかったり、「知られたくない」と我慢していたりすることが多く、周りの人が異変に気付く必要がある。「うつ病かもしれない」と感じたら、診察治療を受けるよう促すことが大切だ。

最後に、新型コロナに対する各国の入国条件や医療対応、感染に対する認識は現在も錯綜としており、この記事が読まれる時点で、どのような状況にあるのか想像がつかない。絶えず新しい情報に耳を傾けてほしい。コロナ禍が「病気に対するリスクが常に身近なものであり、病気から自身や周囲の身を守るためには初期対応が大事である」と認識するきっかけになれば幸いである。

### 日比谷クリニック 基本情報

|        |                                                                     |
|--------|---------------------------------------------------------------------|
| 代表者    | 奥田 文二 院長                                                            |
| 住所     | 〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-7-1<br>有楽町電気ビル南館3階                            |
| 電話番号   | 代表:03-3215-1105<br>留学・ビザ・PCRセンター:03-3217-1105                       |
| ホームページ | <a href="https://hibiya-clinic.com/">https://hibiya-clinic.com/</a> |
| 主な業務内容 | ◆海外渡航者向け予防接種の実施<br>◆海外渡航者健診の実施<br>◆留学・ビザ診断書の発行                      |